

カウンターパートの葬儀

JICA 長期派遣専門家として以前、技術協力業務に従事したラオスを、11 年ぶりに訪れることになった。ピエンチャンに到着直後、かつて一緒に仕事をしたカウンターパートに電話をしたところご家族が出て、本人は病床にあることが告げられた。先日まで入院して治療に専念していたのだけれど、あまり改善が見られないまま退院させられたとのこと。翌日見舞いに行くことを約束して電話を切った数時間後に亡くなってしまった。なんとタイミングの悪いこと。せめて一目、会いたかった。

翌日通夜が行われ、ご自宅を弔問した。故人が眠る棺の上にはお神輿のように修飾された仏塔が設えられており、なぜか華やか。こちらのしきたりで、もち米と線香とお悔やみの現金を入れた袋を、今はご遺族となった奥様にお渡しする。次第に増える弔問客の中には 11 年ぶりに会う顔なじみも多い。そういう人たちは口々に「なんだオマエ、わざわざ来てくれたのかよー！」と大感激してくれるが、そのたびに「違う違う、偶然なんだゴメンゴメン」なんて説明を繰り返すこととなった。(清治 有)

“アールディーアイ通信 No. 122/2022”から



写真: 以前の同僚が支度してくれた袋に入れたもち米と線香

ラオス・ピエンチャン 2022 年

海辺から来た魚売り

ザンベジア州ナマクラ郡フルキアという村で農民組織運営の研修をしていると「あーお！」という声が時折聞こえてきた。近くのグラウンドでサッカーでもしているのかと思ったが、歓声が聞こえてこないのが不思議に思ったところ、魚売りの声だという。彼は、40 キロメートルほど離れたマクセというモザンビーク海峡に面した港町から、自転車で 2~3 時間かけてこの村に来るらしい。自転車の後ろに括り付けたかごの中にエビを含む小魚が入っていた。種類は問わず一掴み 10 メティカイシュ(約 20 円)、ビニール袋ではなく教科書のような本のページを破いて包んでいた。

わざわざ内陸の村までやって来て販売するのは、港町では販売競争が厳しいのと、この村には名産品の



カチャーソというサトウキビから造る焼酎があり、売り上げでそれを買って戻り、販売する目的があるからだという。カチャーソは農家が造る。儲けたお金で家を建てた人もいるというほど人気がある。しかし、肝心の魚の売れ行きはイマイチ。カチャーソを仕入れるのに、500 ミリリットル入りのペットボトル 1 本に 100 メティカイシュ(約 200 円)かかる。彼の「あーお！」という声は村でしばらく響いていた。(時田 裕子)

“アールディーアイ通信 No. 121/2022”から

写真: 売り物の魚類一掴み分

モザンビーク・ザンベジア州 2022 年

米の飲み物ニペパ

初めてニペパと出会ったのは、ザンベジア州の農村部インタボ郡で実施されたフィールドデイでのことである。午前中の作業がひと段落して農家が昼食の準備にかかり、カウンターパートと休憩している時だった。コップに白くどろんとした液体が注がれて、農家からどうぞと勧められた。酒かと思ったが、口に入れると甘く冷たい濃い目のおかゆという感じで、ゆっくりと飲みほした。カウンターパートが米の飲み物だと教えてくれた。舌に米の粒を感じることはなく、味付けに砂糖を入れるそうで、癖はなくとても飲みやすかった。それ以降、調査団や農業省の人と農家や農民組織を訪問した際に何度か飲んだことがあった。味はどこでも同じでちょうどよい甘さのやさしい飲み物。食事を出す時間ではないがちょっと飲んでいってください、といった感じの飲み物だろうか。コップ一杯を飲み終わると結構お腹に溜まっていた。



ニペパはケリマネ市内では見たことがなく飲んだことはない。地方出張の時だけの楽しみである。(大竹 雅洋) “アールディーアイ通信 No. 120/2022”から

写真:農家が供してくれたニペパ

撮影:清治 有 ニコアダラ郡 2022 年

花嫁修業か母親修業か

モザンビークのザンベジア州で実施中の技術協力プロジェクトにこれまで2度、計3カ月ほどの出張をした。カウンターパートの多くは郊外に住むが、一人は、州農業・水産局が職員のために借りているケリマネ市内の団地に家族4人で住んでいる。2022年3月下旬の2回目の出張時にお宅に招いてくれた。州職員は高学歴、高所得であることが多く、住まいと暮らしぶりが恵まれているように見えるが、3月初旬に国の北部を襲ったサイクロンの影響で天井には雨漏りの跡が残り、リビングのラグはまだ乾かず干しているところだった。昼食の準備を手伝いながら、年明けに結婚したことを伝えた。それを聞いた彼女は「花嫁修業が必要ね」と笑いながら、奥の寝室から子供服を持ってきて私に渡した。洗濯物を干すと中に小さな蟻が入り込んでしまうことがあり、その服を子供が着ると大変なことになるため、必ずアイロンがけをするらしい。小さなレギンスにアイロンをかけながら「これは花嫁修業を越して母親修業では？」と思った。昼食後にTVの料理番組を見ながら「これだけ料理上手だったら旦那さんは誇らしいね」と談笑し、子供2人の主婦と休日を過ごして、自分も主婦になったのだと実感した。(時田 裕子)



“アールディーアイ通信 No. 119/2022”から

写真:同じ団地の友達と遊ぶカウンターパートの子どもたち

モザンビーク・ケリマネ 2021 年

ケリマネの新型コロナウイルス感染症 その4

モザンビークのザンベジア州で実施中の技術協力プロジェクトは、2021年9月に現地業務を再開した。当時のザンベジア州をはじめモザンビークの新型コロナウイルス感染状況は落ち着いており、ケリマネでは日に日にマスクをつける人も減って、コロナ禍前の生活に戻りつつあるように見えた。11月下旬に南アフリカ共和国でオミクロン株が出現し、日本人は緊急帰国し、その後モザンビークの感染者数も急拡大した。感染が落ち着いた2022年2月に再びケリマネに渡航したが、人々の生活は既に元に戻っていた。銀行やスーパーに入るときは検温と消毒があるが、それ以外はほとんど気にならないほどで、マスクをつける人もほとんど見られなくなっていた。

新型コロナウイルスの感染拡大時期にモザンビークに滞在したことはなかったが、マスクの着用や距離を



保つ、消毒といった、基本的な感染対策以外、取られることはなかった。商店の営業時間の制限や外出時のマスク着用を点検する警察官が街頭にいたこともあったが、感染が落ち着くと、元の生活に戻ろうとする。なので、現地に行くと、コロナ禍が無かったかのような、また無くなったかのような錯覚に陥ってしまう。これが良いのかよくわからないが、閉塞感は感じられず、ちょっと羨ましい気もする。(大竹 雅洋)

“アールディーアイ通信 No. 118/2022”から

写真: 人の集まる所などに設置された4つ口の手洗いバケツは蛇口が足踏み式

撮影: 時田裕子 モザンビーク・マップト 2021年12月

マンゴーの樹におまじない

モザンビーク・ザンベジア州モペイア郡で活動中、訪問した農家の庭のマンゴーの樹に稲藁(いなわら)が巻き付けられていることに気が付いた。数本あるマンゴーの樹のうち、家屋に一番近い樹の幹に稲わらが結ばれていた。その農家の主に訊いてみると、マンゴーの実が風に吹かれて落とされないことを願う、おまじないだそうである。改めて注意してみると、同州の他の郡でも稲藁が巻かれたマンゴーの樹が目につくようになり、どうやらこれはこちらではかなり一般的な習慣のようである。

日本では主に神道の神事として、神聖な場所などを俗世間と隔てるためにしめ縄を張ることがある。おいしい実を提供してくれるマンゴーの樹が強風という外部の力の影響を受けないことを願って稲藁を巻き付けるおまじないの行為は、しめ縄の風習に似たところがあるように思える。



日本古来の風習であるしめ縄に似た行為が、遠く隔たったモザンビークの人々の暮らしの中に見られたことに驚くとともに、大陸やインド洋を経てそれが共有された経緯があるのかなのか、その経路解明にも興味をそそられる。(清治 有)

“アールディーアイ通信 No. 117/2022”から

写真: しめ縄に似た風習が遠く離れたモザンビークでも見られることがとても不思議に思える。

モザンビーク・ザンベジア州 2021年